



# ドクター板東の メディカルリサーチ

～先人の お陰で医学 ここまでに～

Vol. 65

<http://hb8.seikyou.ne.jp/home/pianomed/>

先月の本コーナーでは、東日本大震災と災害派遣医療チーム(DMAT)などについて触れた。東北地方への救援活動は長期に続いている。慢性疾患に加え、精神・心理的ストレスに対するケアが今後重要となっていくであろう。

人類の歴史を振り返ると、様々な災害や戦争が過去にみられた。これらは誠に痛ましいことだ。しかし、一方で、これらの医療現場における経験が積み重ねられ、医学が発展してきたこともまた事実である。

## 日本医学会

本邦における医学の経緯について示す。明治35年(1902)4月、第1回日本聯合医学会が、上野の東京音楽学校で開催された。このとき、16の分科会が参加し、これが日本医学会の創設となっている。

第3回から日本医学会と改称され、以後4年ごとに開催。2011年が第28回目となり、今まで連続と続いてきた。

## 医学教育史展

今回、日本医学会が主催した展示があった。上野駅



図1

今回のテーマは「歴史で見る・日本の医師のつくり方」である(図2)。本展示は年代によつて、I～V群に分かれていた。

I・近代医学への接触  
II・近代西洋医学の導入  
III・近代医学教育の普及  
IV・災害・戦時の医学教育、  
V・アメリカ医学の移入



図2

展示室に足を踏み入れた。第I群の最初に展示されているのが、杉田玄白著「解体新書」5巻(1774)だ。

I群で興味深い書類が残されている。江戸幕府の医学所で勤務していた医師・手塚良斎が記した「医学所御用留」である(図3)。

後に大学東校となり、現在の東京大学医学部へと移行した。なお、良斎は漫画家・手塚治虫の先祖にあたる医師にあたる。

次にIII群で、本邦第1号のX線撮影装置(図4)や管球等がみられた。1895年、世界でX線が発見され、医学で応用できるこ

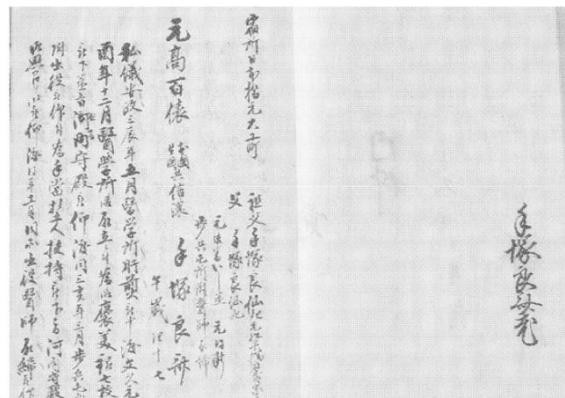


図3

上野公園がある。広い敷地の中には、いまパンダで人気の上野動物園もあれば、国立科学博物館もある(図1)。ここでは様々な展示が企画され、老若男女が楽しめる。私も科学者の一人としてよく足を運ぶ。

争に従軍し足部に銃創を負つた乃木希典の傷を示す。たまたま、見舞いに訪れた広島予備病院でX線装置の存在を知り、撮影してもらったものである。

## 魯迅と藤野先生

以前、筆者が仙台を訪れたとき、仙台医学専門学校時代の医学教育について見聞きしたことがあった。図6は解剖学の実習風景で、中央の教官は藤野厳九郎教授である。

藤野氏（図7）が懇切に指導した弟子が、著名な中国の文学者・思想家の魯迅（図8）であった。彼は当時、年日本に持ち帰り、軍医学装置を購入して1998年日本に持ち帰り、軍医学校に寄贈したという。

これに関連した足のX線写真がある。図5は西南戦

図5



図4

医專から帝大となる際、藤野氏を含む18名の教官は4名しか同校に残ることができず、新たに25名が就任。なぜだろうか。当時、帝大の教官になるには帝大卒で医学博士の肩書きを有するか海外留学の履歴が必要であったからだ。

氏は愛知医学校の出身で留学経験がなく退官。郷里に戻つて耳鼻科の医院を開業し、その後魯迅からの中國訪問の誘いにも応えず、1945年に死去した。

## チーム医療の時代

医学教育史展でV群は近代医療を解説し、米国の影響が大きい。筆者が19

80年代に米国で臨床研修した際、医療関係職種は100以上あり、その全

関係は単に医学教育にとどまらず、文学や両国間における国際理解にも大きく貢献したと云えよう。

その後、仙台医専は東北帝国大学医科大学から東北大学医学部へと変遷していく。ここで残念だがやむを

得ない事態が生じた。

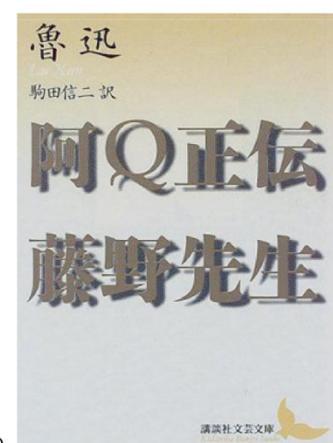


図10

体像は掴みきれないなどと聞いたことがあった。

いま日本では、病院で働く専門職（国家資格）が22種に至る。病院の従事者数について(2002→2009)、医師は18.4万人→20.1万人、コメディカルスタッフ数は145万人→288万人、割合は89%↓94%と急増してきている。つまり、チーム医療の時代となつた。

日本P.C連合学会は医療関係者すべてが参集し研鑽を深めてきた学会だ。日本医学会の中で特徴ある分科会として、医学教育や社会に貢献を続けていきたいものである。

（板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアニスト）



図5



図6



図7



図8

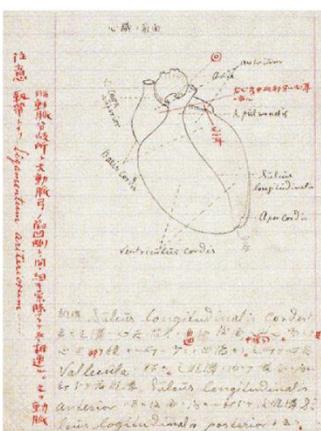


図9

（板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアニスト）